

英語を母語とする日本語学習者のエッセイ における述語形式

—丁寧形と普通形の混用に注目して—

加藤恵梨（愛知教育大学）

【要約】

本研究は、英語を母語とする日本語学習者（以下、ENS）のエッセイを調査資料とし、エッセイの述語形式に丁寧形と普通形の混用が生じているのか、それは日本語の習熟度によって違いがあるのか、日本語母語話者の書いたエッセイと比べて違いがあるのかについて分析した。その結果、数は多くないが、ENSのエッセイには丁寧形基調の文章に普通形の文が使われているものと、普通形基調の文章に丁寧形の文が使われているものがみられ、それらの使い方は日本語の習熟度によって違いがあることなどが明らかになった。

1. はじめに

日本語の述語形式には、「です・ます」がつく丁寧形と「です・ます」がつかない普通形とがあり、同一文章内ではどちらかに統一されることが通例とされる。実際には、丁寧形が基調となっている文章に普通形の文が混用されることがあり、日本語教育でも指導を行うべきであると指摘している先行研究もある。本研究では、管見の限り、今まであまり調査されていない英語を母語とする日本語学習者（以下、ENS）のエッセイを調査資料とし、エッセイの述語形式に丁寧形と普通形の混用が生じているのか、また、それは日本語の習熟度によって違いがあるのか、さらには日本語母語話者（以下、JNS）のエッセイと比べて違いがあるのかについて分析する。

2. 先行研究の記述の検討

普通形と丁寧形の混用の現象は、話し言葉の研究で数多く扱われている。奥野（2014）は、先行研究をもとに普通形と丁寧形の混用には、「話し手と聞き手の関係性（上下・親疎・立場関係）や発話の場面差などの社会的条件、聞き手を意識した発話か否かという談話の展開標識としての構文的条件、話し手の心理距離の調整という心理的条件が関わっていることが明らかとなっている」（p. 354）と述べている。このように、話し言葉においては、丁寧形・普通形は、丁寧さや改まりの有無をあらわすスタイルであり、相手との関係や場面等の社会的要因によって使い分けられるが、それは原則的な用法であり、実際には丁寧形を使うべき相手や場面であっても、一時的に普通形が使われることがある（岡崎ほか 2025: 141）。特に、率直な感情を表出する発話（例「すごい」「かわいい」）や独話的な発話を行うとき、相手の発話を繰り返したり言い換えたりして確認するとき等であることが指摘されている（岡崎ほか 2025: 141）。

一方、書き言葉における述語形式の混用を扱った先行研究に、メイナード（1991）、野田（1998）、熊谷（2001）、石黒（2006）、黒木（2006）、中村（2011）、奥野（2014）、砂川・マダドナー（2017）などがある。鏡（2021）は、メイナード（1991）、野田（1998）、熊谷（2001）、石黒（2006）、黒木（2006）、中村（2011）、砂川・マダドナー（2017）で記述されている丁寧形基調の文章における普通形の文の特徴を次の表1のようにまとめている。

表1 丁寧形基調の文章における普通形の文の特徴（鏡 2021、p. 119 の表 1）

先行研究	調査対象	文の従属性	文の意味内容	文の出現位置
メイナード (1991)	小説の会話文、 随筆	情報を後景化する文	話者が感情をそのまま表現する文	—
野田 (1998)	エッセイ、 小説など	他の文に従属している文	聞き手に伝達する意識がないまま、自分が思ったことを述べる文	—
熊谷 (2001)	新聞投書	—	筆者の心理が表現される文	投書の中間部 (筆者の論が展開させる部分)
石黒 (2006)	エッセイ、 小説など	後続文への依存性の高い文	事実や報告を表す文	—
黒木 (2006)	小論文	後続文に従属的な内容を持つ文	—	段落の最初の部分
中村 (2011)	論説的文章	—	対比、問題提起と解答、判断・意見、手順・順序、科学的根拠を表す文（筆者が自身の思考を過程的に提示する文）	(手順・順序と科学的根拠を表す文に関して) 段落の中間部
砂川・ マダドナー (2017)	東京新聞社説	前後の文脈に対して従属度の高い文（後景的な情報を明示する文）	重要な主張の根拠や前提を提示する文	—

表1のように、先行研究では、丁寧形基調の文章中にみられる普通形の文の特徴は、「文の従属性」「文の意味内容」「文の出現位置」という三つの観点に注目して記述されている。本研究が調査対象とするエッセイは段落わけがされていないものが多いため、本研究では「文の出現位置」については扱わず、丁寧形基調の文章中にみられる普通形の文の特徴、および、普通形基調の文章中にみられる丁寧形の文の特徴について、「文の従属性」と「文の意味内容」という観点から分析する。「文の意味内容」については、砂川・マダドナー（2017）の分類に従うこととする。

砂川・マダドナー（2017：54）は、丁寧形を基調とする東京新聞の社説において普通形の文が生じる場合の量的な調査を行い、文形シフトの要因を整理している。具体的には、文を平叙文と疑問文にわけ、それぞれの文の機能に応じ、次のようにさらに細かく分類している（pp. 57-60）。

平叙文：①「叙述」、②「主張」、③「心情」、④「引用」

疑問文：①「疑問」、②「主張」、③「問題提起」

砂川・マダドナー（2017）にもとづき、それらの概略を述べる。まず平叙文について、「①叙述」に属する文には、「(1)時間軸に沿って生起する出来事を表す文、(2)特定の時間における一時的な状態を表す文、(3)恒常的な状態を表す文、(4)ことがらに対する話者の判断を表す文のうち、書き手の主張とは感じられない文」（p. 57）がある。続いて「②主張」を表す文とは、「ことがらに対する話者の判断を表す文のうち書き手の意見や価値評価を表していると考えられる文」（p. 58）である。「③心情」

を表す文とは、「心理、感覚、希望、願望といった書き手の心情を述べる文」(p. 58) のことである。最後に「④引用」とは、「第三者の発言や思考内容を引用しているもので、多くは(中略)カギ括弧でくくられている」(p. 59) ものである。一方、疑問文について、「①疑問」とは「読み手に対する問いかけや書き手の疑念を表す」(p. 60) 文である。次に「②主張」とは、「読み手に問いかける形で書き手の意見を主張する文」(p. 60) である。さらに「③問題提起」とは、「読み手に問いかける形をとりながら、次の議論の課題を提起する文」(p. 61) である。

砂川・マダドナー(2017: 70) は分析の結果、基調の丁寧形から普通形へのシフトには主張の連鎖内部の後景的な情報を明示するという構造的な要因のほかに、重要な主張をより効果的に提示するという書き手の心理的な動機という要因があることを明らかにしている。

以下では、丁寧形基調の文章中にみられる普通形の文の特徴、および、普通形基調の文章中にみられる丁寧形の文の特徴について、「文の従属性」と「文の意味内容」という観点から分析する。

3. 調査資料について

本研究で調査資料とするのは、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(以下、I-JAS) の任意作文データのエッセイ「私たちの食生活：ファースト・フードと家庭料理」であり、エッセイの課題は、「私たちは日常生活で、ファースト・フードと家庭でゆっくり味わう手作りの料理を食べています。ファースト・フードと家庭料理を比較し、それぞれの良い点や悪い点などを説明して、『食生活』についての意見を600字程度で書いてください」というものである。

また、調査対象としたのは、JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境で日本語を体系的に学んでいるENS44名(調査地：ニュージーランド、オーストラリア、アメリカ)のエッセイと、同一課題で執筆された日本語母語話者48名のエッセイである。ENSの日本語レベルは、「J-CAT」の総合得点によって、初級、中級前半、中級、中級後半、上級前半、上級にわけられる。「J-CAT」のレベルの目安は次の表2の通りである。

表2 「J-CAT」のレベルの目安(李ほか2015: 58の表2)

得点	レベル	説明
0-100	初級	基本的な考えを述べることができる
101-150	中級前半	日常的な会話をこなすことができる
151-200	中級	
201-250	中級後半	
251-300	上級前半	学術的・専門的なコミュニケーションができる
301-350	上級	
351-400	日本語母語話者相当	

表2の基準をもとに分類した結果、本研究が調査対象とする44名のENSの日本語学習レベルは、初級が2名、中級前半が17名、中級が13名、中級後半が9名、上級前半が3名である。

4. 分析

4.1 ENSとJNSのエッセイにおける混用

ENSとJNSのエッセイにおいて、丁寧形基調で書かれているか、普通形基調で書かれているかを調査し、丁寧形基調で書かれている場合には普通形があらわれる文章および文の数を、一方の普通形基調

で書かれている場合には丁寧形があらわれる文章および文の数を記述したものが次の表 3 である。

表 3 ENS と JNS のエッセイにおける混用の数

文章の種類		ENS (44編)					JNS (48編)
		初級 (2編)	中級前半 (17編)	中級 (13編)	中級後半 (9編)	上級前半 (5編)	
丁寧形基調の文章	丁寧形基調の文章の数	2編 (100%)	12編 (71%)	8編 (62%)	4編 (43%)	0	10編 (21%)
	普通形があらわれる文章の数/文の数	1編 (50%) / 1回	4編 (24%) / 9回	1編 (7%) / 1回	0		3編 (6%) / 11回
普通形基調の文章	普通形基調の文章の数	0	5編 (29%)	5編 (38%)	5編 (57%)	5編 (100%)	38編 (79%)
	丁寧形があらわれる文章の数/文の数		0	4編 (31%) / 8回	1編 (11%) / 6回	0	1編 (2%) / 1回

表 3 から、ENS は初級、中級前半、中級では丁寧形基調の文章のほうが多い（初級 100%、中級前半 71%、中級 62%）が、中級後半では丁寧形基調と普通形基調がほぼ半々（丁寧形基調 43%、普通形基調 57%）となり、上級前半では普通形基調（100%）で書かれていることがわかる。また、初級、中級前半、中級では丁寧形基調の文章に普通形があらわれていたり、普通形基調の文章に丁寧形があらわれている文章もみられるが、中級後半と上級前半ではほとんどみられない。JNS においては、普通形基調で書かれているもののほうが多く（79%）、混用もほとんどみられない。

奥野（2014: 353）は、日本語教育における「書く」教育では、初級での作文、中上級での意見文等の指導が主流であり、初級ではデスマス体、中上級になると書き言葉であるダ体、デアル体による論理的な書き方の訓練が行われており、その際の指導の重要なポイントの一つが同一文書内での文体の統一、つまり混用を避けることとされていると指摘している。本調査においても、日本語教育における「書く」教育で行われている指導が反映された結果となっている。そのようななかでも、混用にはどのような特徴がみられるのだろうか。

4.2 丁寧形基調の文章にみられる普通形の文

まず、丁寧形基調の文章に普通形の文があらわれる場合についてみる。砂川・マダドナー（2017）に従い、文を平叙文と疑問文にわけ、さらに、平叙文を「叙述」、「主張」、「心情」、「引用」に、疑問文については「疑問」、「主張」、「問題提起」に下位分類する¹。

4.2.1 全体の数

丁寧形基調の文章にみられる普通形の文を下位分類したものが次の表 4 である。

表 4 丁寧形基調の文章にみられる普通形の文の種類

		叙述 (平叙文)	主張 (平叙文)	心情 (平叙文)	引用 (平叙文)	疑問 (疑問文)	主張 (疑問文)	問題提起 (疑問文)
ENS	初級 (1回/1編)					1回/1編		
	中級前半 (9回/4編)		8回/1編		1回/1編	1回/1編		
	中級 (1回/1編)		1回/1編					
	中級後半 (0)							
	上級前半 (0)							
JNS	JNS (11回/3編)	6回/2編	5回/3編					

¹ 中級前半レベルの ENS の文章に次のようなものがある。

このひとにファストフードほど便利な食事がありません。でも、ファストフードの食べ物にはカロリーがたくさんあります。よく食べる (ENZ32、中級前半)

上は、丁寧形基調のなかに「よく食べる」という普通形の平叙文が用いられていることはわかるが、「よく食べる」が平叙文のうちのどれであるかを理解するのが難しいため、考察対象外とした。

丁寧形基調の文章にみられる普通形の文について、初級から中級レベルの ENS は、初級では疑問文（疑問）で用いているが、中級前半と中級では主に平叙文で用いており、そのなかでも「主張」と「引用」での使用がみられる。一方、JNS は平叙文でのみ用いており、そのなかでも「叙述」と「主張」で使用している。以下で具体例をあげながら詳細にみていく。

4.2.2 疑問（疑問文）

初級レベルと中級前半レベルの ENS はそれぞれ 1 回（1 編）、次の(1)と(2)のように疑問文の「疑問」を用いている。

(1) 三十五分の一以上のアメリカ人の大人はデブです。なぜ？ファストフードはべんりです。

(EUS38、初級)

(2) 宿題の締め切りが来て、犬が散歩に行きたいで、家が汚いです。それより、お腹がすいて、少ない時間があります。どうする？家で料理できるけど、通りの向こう側のマクドナルドが凄く便利です。 (EUS47、中級)

(1)と(2)は、丁寧形基調で書かれているが、「なぜ？」「どうする？」が普通形となっている。ここでの「なぜ？」「どうする？」は前の文脈の従属度の高い文である。(1)は前で述べた事実に対する書き手の疑念をあらわし、(2)は前で述べたことがらについて読み手に対する問いかけをあらわしている。このように、ここでは書き手の率直な疑問を表現するのに普通形を用いている。このような疑問文は日本語の習熟度が高くなるにつれ、使われていない。

4.2.3 主張（平叙文）

続いて平叙文についてみる。平叙文のなかの「主張」は、中級前半レベルの ENS が 6 回（1 編）、中級レベルの ENS が 1 回（1 編）、JNS が 5 回（3 編）用いている。

まず、ENS の文章についてみる。

(3) 例えば、材料に何か入れたのは分からなく、アレルギーもかかるかもしれません。思い病気になるだろう。治療の価格に比べて、健康のためにすこしきちょうめんに考えたほうがいだろう。いつもファーストフードを食べることはたいで健康にかんげいがない人のような性格だろう。結局重い病気になっているのはくいもののせいじゃないです。最も大切な物はくいものが自分のライフスタイルにどんな効果が有るかどうか、その責任をどのぐらいひきうけられて、結果を注目したほうがよいだろう。

(ENZ30、中級前半)

(4) しかし、このごろファストフードは人気すきると思います。確かに便利で安いですが、体によくない。世界中に若い人はファストフードを食べ過ぎて太ってしまいます。

(ENZ08、中級)

(3)は中級前半レベルの ENS の文章である。「例えば、材料に何か入れたのは分からなく、アレルギーもかかるかもしれません」という意見を述べた後、下線部のように、さらなる意見を述べる際に普

普通形を使っている。続いて(4)は中級レベルの ENS の文章である。(4)も(3)と同様に、前の文で意見を述べ、さらなる意見を加える際に普通形を用いている。このように、ここでの普通形の文は前の文脈への従属度が高く、前の文脈で述べた主張に更なる主張を加えている。砂川・マダドナー (2017:70) で指摘されているように、重要な主張をより効果的に提示するという書き手の心理的な動機によって、普通形が使われていると考えられる。

次に、JNS の文章をみる。JNS の文章では、先ほどみたような、前の文章で述べた主張に更なる主張を加えるときに用いるだけではなく、次のような使い方もみられる。

- (5) 家庭料理にしても専業主婦の方なら栄養、カロリーなどをきちんと考えたうえで料理も作ることが出来るでしょう。しかし今の世の中、仕事を持つ主婦が増えているので、家に帰ってからなかなか料理が作れない。作るとしても一品料理。品数が少ない。肉を焼いただけ。野菜を炒めただけなど同じようなものが毎日並んでいたらどうでしょうか。スーパーのお惣菜で済みます。お弁当で済みます。なんてことも多いのではないのでしょうか？

(JJJ09)

(5)では、「家庭料理にしても専業主婦の方なら栄養、カロリーなどをきちんと考えたうえで料理も作ることが出来るでしょう」と意見を述べた後、「しかし今の世の中、仕事を持つ主婦が増えているので、家に帰ってからはなかなか料理が作れない」というように、前の文で述べた意見に反論している。このように、JNS は前の文で述べた主張に対して反論するときにも普通形を用いている。これも、重要な主張をより効果的に提示するという書き手の心理的な動機によって、普通形が使われていると考えられる。なお、ここでの普通形の文は、前の文脈で述べた主張に反論しており、前の文脈への従属度が高い。

4.2.4 引用（平叙文）

次に「引用」についてみる。「引用」は中級前半レベルの ENS が 1 回（1 編）用いている。

- (6) 母は『ファストフードを食べてはいけませんよ!』と言います。マクドナルドを食べたら、大きくなると言った。

(EUS11、中級前半)

(6)は下線部のように、母親が言ったことばを間接引用する際に普通形を用いている。ここでは、まず母親のことばを直接引用し、その後で普通形を用いて間接引用することで、前の文の内容を詳しく説明している。引用で普通形を用いているのはこの一例のみであった。

4.2.5 叙述（平叙文）

最後に「叙述」についてみる。「叙述」は ENS は用いておらず、JNS が 6 回（2 編）用いている。

- (7) 家庭料理にしても専業主婦の方なら栄養、カロリーなどをきちんと考えたうえで料理も作ることが出来るでしょう。しかし今の世の中、仕事を持つ主婦が増えているので、家に帰ってから

なかなか料理が作れない。作るとしても一品料理。品数が少ない。肉を焼いただけ。野菜を炒めただけなど同じようなものが毎日並んでいたらどうでしょうか。スーパーのお惣菜で済みます。お弁当で済みます。なんてことも多いのではないのでしょうか？

(=5)

(7)では、「しかし今の世の中、仕事を持つ主婦が増えているので、家に帰ってからなかなか料理が作れない」という主張の後、「作るとしても一品料理」「品数が少ない」「肉を焼いただけ」のように前の文で述べた主張の根拠となる例を提示している。またその後の文では、「野菜を炒めただけなど同じようなものが毎日並んでいたらどうでしょうか」と問いかけた後、「スーパーのお惣菜で済みます。お弁当で済みます」のように問いかけに対する答えの例を述べている。このように、JNSは主張の根拠となる例を提示する際に平叙文を用いている。ここでは、簡潔に複数の説明を加えようという書き手の心理的な動機によって、普通形が使われていると考えられる。いずれも前の文脈への従属度が高い。

4.3 普通形基調の文章にみられる丁寧形の文

次に、普通形基調の文章に丁寧形の文があらわれる場合についてみる。普通形基調の文章についても砂川・マダドナー(2017)に従い、文を平叙文と疑問文にわけ、さらに、平叙文を「叙述」、「主張」、「心情」、「引用」に、疑問文については「疑問」、「主張」、「問題提起」に下位分類する。

4.3.1 全体の数

普通形基調の文章にみられる丁寧形の文を下位分類したものが次の表5である。

表5 普通形基調の文章にみられる丁寧形の文の種類

		叙述(平叙文)	主張(平叙文)	心情(平叙文)	引用(平叙文)	疑問(疑問文)	主張(疑問文)	問題提起(疑問文)
ENS	初級(0)							
	中級前半(0)							
	中級(8回/4編)		3回/3編			1回/1編	4回/2編	
	中級後半(6回/1編)	2回/1編	2回/1編			2回/1編		
	上級前半(0)							
JNS	JNS(1回/1編)					1回/1編		

普通形基調の文章にみられる丁寧形の文について、中級レベルのENSは、平叙文では「主張」、疑問文では「疑問」と「主張」で用いている。中級後半では、平叙文では「叙述」と「主張」、疑問文では「疑問」での使用がみられる。一方、JNSは疑問文の「疑問」でのみ用いている。以下で具体例をあげながら詳細にみていく。

4.3.2 主張(平叙文)

平叙文の「主張」は、中級レベルのENSが3回(3編)、中級後半レベルのENSが2回(1編)用いている。

(8) その通りで、健康な生活のために、バランスのあるのが必要だと思う。確かに、お金は大事だが、自分で健康的な料理も大切です。伝統的食事を使え、新しい方法も作れ、体に充実だけではなくて、心に薬なので、幸せになるはずだ。

(EAU32、中級)

(9) ファーストフードは安くて美味しくて、手料理を作るより便利だ。

でも、私たちは実際に手料理を軽く忘れられるものでしょうか。確かに、ファーストフードはとても便利だけど、それに対してどういう気持ちや思い出がありますか。手料理に比べたら、ファーストフードは早く食べていて、思いを込めなくて作ったものだ。手料理の話にすれば、よく「母の手料理」と「恋人からの手料理」のことが現れます。美味しくて、まずくても、そのすべては思いや感情を込めて作っていたんだ。それは食べている人に、感じさせていたことだと思えます。

(EAU18、中級後半)

(8)は中級レベルの ENS の文章である。「その通りで、健康な生活のために、バランスのあるのが必要だと思う」という意見を述べた後、下線部のように、さらなる意見を述べる際に丁寧形を使っている。続いて(9)は中級レベルの ENS の文章である。「美味しくて、まずくても、そのすべては思いや感情を込めて作っていたんだ」という手料理についての説明の後、下線部のように意見を述べるのに丁寧形を使っている。このように、ここでの丁寧形の文は前の文脈への従属度が高く、前の文脈で述べた主張に更なる主張を加えたり、あるものごとに対する主張を述べたりするのに用いられている。これらも普通形基調の文章にみられる丁寧形の「主張」(平叙文)と同様に、重要な主張をより効果的に提示するという書き手の心理的な動機によって、丁寧形が使われていると考えられる。

4.3.3 叙述(平叙文)

平叙文の「叙述」は、中級後半レベルの ENS が 2 回 (1 編) 用いているのみである。

(10) ファーストフードは安くて美味しくて、手料理を作るより便利だ。

でも、私たちは実際に手料理を軽く忘れられるものでしょうか。確かに、ファーストフードはとても便利だけど、それに対してどういう気持ちや思い出がありますか。手料理に比べたら、ファーストフードは早く食べていて、思いを込めなくて作ったものだ。手料理の話にすれば、よく「母の手料理」と「恋人からの手料理」のことが現れます。美味しくて、まずくても、そのすべては思いや感情を込めて作っていたんだ。それは食べている人に、感じさせていたことだと思えます。

(= (9))

(10)では、「手料理に比べたら、ファーストフードは早く食べていて、思いを込めなくて作ったものだ」というようにファーストフードについての意見を述べた後、下線部のように手料理の話をする際に丁寧形を使っている。ここでは次の話題へと展開するのに丁寧形を使っており、前の文脈への従属度は高くない。話題をかえることを明示しようという書き手の心理的な動機によって、丁寧形が使われていると考えられる。

4.3.4 疑問(疑問文)

次に疑問文をみる。まず、疑問文の「疑問」は、中級レベルの ENS が 1 回 (1 編)、中級後半レベル

の ENS が 2 回（1 編）、また JNS が 1 回（1 編）用いている。

- (11) 日本食や和食など、多くの食べ物がある。その中で食べ物の二つの種類がある。ファストフードには種々があるし、手料理は家族や友達と一緒に食事を楽しく準備して。ファストフードも、手料理もあるだが、どちらの方がいいでしょうか。

(EAU03、中級)

- (12) ファーストフードは安くて美味しくて、手料理を作るより便利だ。

でも、私たちは実際に手料理を軽く忘れられるものではないでしょうか。確かに、ファーストフードはとても便利だけど、それに対してどういう気持ちや思い出がありますか。手料理に比べたら、ファーストフードは早く食べていて、思いを込めなくて作ったものだ。手料理の話にすれば、よく「母の手料理」と「恋人からの手料理」のことが現れます。美味しくても、まずくても、そのすべては思いや感情を込めて作っていたんだ。それは食べている人に、感じさせていたことだと思います。

(= (10))

- (13) 満員電車、サービス残業、都会の人ごみ、繰り返される毎日。そんな時代に現れた海外からのファーストフード。本当にそうでしょうか？早歩きの日々の中で一度立ち止まってみてはどうだろうか。

(JJJ07)

(11)は、ファーストフードと手料理について説明した後、「どちらの方がいいでしょうか」と読み手に問いかけている。(12)ではファーストフードの利点を述べた後、「でも、私たちは実際に手料理を軽く忘れられるものではないでしょうか」と書き手の疑念をあらわし、続けて「確かに、ファーストフードはとても便利だけど、それに対してどういう気持ちや思い出がありますか」と読み手に問いかけている。さらに(13)は、ファーストフードについて説明し、それに対して「本当にそうでしょうか？」と疑念をあらわしている。ここでの疑問文は前の文脈をうけて疑問を呈しているため、従属度の高い文である。4.2.2でみた丁寧形基調の文章にみられる普通形の疑問文(疑問)は、習熟度が高くなるにつれて使われていなかったが、普通形基調の文章にみられる丁寧形の疑問文(疑問)は、中級後半でも使用がみられるように、習熟度が高くなっても使われている。

4.3.5 主張(疑問文)

疑問文の「主張」は、中級レベルの ENS が 4 回（2 編）用いている。

- (14) 第一の差違は時間だ。準備時間はファストフードや手料理にとって違う。手料理は多くの時間がかかる、あとに皿洗い時間も必要だ。ファストフードはとても早く、そして便利である。料理ができない人に問題ないではないでしょうか。食べ終わると皿洗いことは必要ではない、ゴミ箱にゴミを捨てる。しかしこれからゴミ問題が起きるのではないのでしょうか。

(ENU03、中級)

- (15) これからチョイスがある。どっちでもいい点もあるではないでしょうか。みんなはファーストフードも手料理も必要と思わないか。家で手料理にするし、時々ファーストフードもいい

ことではないでしょうか。

(EAU03、中級)

まず(14)をみると、一つ目の下線部は、ファストフードの利便性について述べ、その後に「料理ができない人に問題ないではないでしょうか」と読み手に問いかける形で書き手の主張を丁寧形の文であらわしている。もう一つは、ファストフードは皿洗いは必要ではなく、容器等をゴミ箱に捨てることに対して「しかしこれからゴミ問題が起きるのではないではないでしょうか」と書き手の意見を述べる際に丁寧形を用いている。続いて(15)の下線部も同様に、読み手に問いかける形で書き手の意見を主張している。このように、疑問文の「主張」では、「～(の)ではないではないでしょうか」という表現が使われている。これらは前の文脈で述べた主張に更なる主張を行っていたり、あることがらに対する意見を述べているため、前の文脈に対する従属度の高い文であるといえる。ここでも、書き手の重要な主張をより効果的に提示するという書き手の心理的な動機によって、丁寧形が使われていると考えられる。なお、丁寧形基調の文章にみられる普通形の文において、疑問文の主張は用いられていなかったが、普通形基調の文章にみられる丁寧形の文においては、疑問文の主張が用いられているという違いがある。

5. おわりに

本研究では、ENS のエッセイを調査資料とし、1. ENS のエッセイの述語形式に丁寧形と普通形の混用が生じているのか、また、2. それは日本語の習熟度によって違いがあるのか、さらには 3. JNS のエッセイと比べて違いがあるのかについて分析した。

その結果、1. ENS のエッセイの述語形式に丁寧形と普通形の混用が生じているのかについては、数は多くないが混用がみられ、丁寧形基調の文章に普通形の文が使われているものだけでなく、普通形基調の文章に丁寧形の文が使われているものもあった。次に、2. それは日本語の習熟度によって違いがあるのかについては、初級、中級前半、中級では丁寧形基調の文章のほうが多いが、中級後半では丁寧形基調と普通形基調がほぼ半々となり、上級前半では普通形基調で書かれているというように、習熟度によって違いがあることがわかった。さらに、3. JNS のエッセイと比べて違いがあるのかについては、JNS では普通形基調で書かれているもののほうが多く、混用の数は多くなかった。

また、丁寧形基調の文章中にみられる普通形の文の特徴、および、普通形基調の文章中にみられる丁寧形の文の特徴について、「文の従属性」と「文の意味内容」という観点から分析した。「文の従属性」については、普通形基調の文章にみられる丁寧形の平叙文（「叙述」）以外は、前の文脈への従属度が高いことがわかった。次に「文の意味内容」については、まず普通形基調の文章にみられる丁寧形の文について、中級レベルの ENS は、平叙文では「主張」、疑問文では「疑問」と「主張」で用いており、中級後半では、平叙文では「叙述」と「主張」、疑問文では「疑問」での使用がみられた。一方の普通形基調の文章にみられる丁寧形の文については、中級レベルの ENS は、平叙文では「主張」、疑問文では「疑問」と「主張」で用いており、中級後半では、平叙文では「叙述」と「主張」、疑問文では「疑問」の使用がみられた。一方、JNS では、丁寧形基調の文章にみられる普通形の文については、平叙文の「叙述」と「主張」で使用しており、普通形基調の文章にみられる丁寧形の文については、疑問文の「疑問」のみであった。

今回は調査対象者が少なかったが、今後は ENS 以外の学習者も調査対象にするなど、調査対象者を

増やして分析を行いたい。また、今回の結果を日本語教育にどのように活かすのかについても考える必要がある。石黒（2023）は丁寧形と普通形について、「この二つを交ぜてはいけないと、学校ではよく教えられますし、多くの方はそれを信じているでしょう。しかし、誰がそのようなことを決めたのでしょうか」（p. 447）というように、丁寧形と普通形を交ぜてはいけないという教育に対して疑問を呈し、「日本語には交ぜてはいけないというルールはなく、現実世界では交ぜ書きが使われています。SNSの世界ではよく見かけますし、後ほど紹介するように、夏目漱石も使っていました。古くから使われている自然な文体であり、うまく使えば、高い表現効果を発揮します。学校で教わったから駄目だと決めつけてしまうと、自分自身の表現世界を狭めることになります」（p. 447）というように、交ぜ書きをすることで、高い表現効果を発揮し、表現世界を広げることができることを指摘している。今後は、日本語教育の「書く」指導において、交ぜ書きをどのように教えるかについて、考える必要がある。

参考文献

- 石黒圭（2006）「日本語学習者の文章表現講座 第五回『です・ます形』と『だ・である形』の共存」『本が好き！』5、pp.41-47、光文社
- 石黒圭（2023）『ていねいな文章大全—日本語の「伝わらない」を解決する108のヒント』ダイヤモンド社
- 岡崎渉、濱田典子、西條結人（2025）「日本語学習者による非デスマス体の待遇レベルの認識—聞き手当て性に着目して—」『日本語教育』192号、pp.141-148、日本語教育学会
- 奥野由紀子（2014）「『励まし』の手紙文における文末文体の混用—ダ体の混用に着目して—」金澤裕之（編）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房、pp.353-378
- 鏡耀子（2021）「丁寧形基調の書き言葉における普通形文末の混用」『日本語／日本語教育研究』12、pp.117-132、ココ出版
- 熊谷滋子（2001）「新聞投書にみる文形の効果—『ですます形』と『非ですます形』の混用を通して—」『人文論集』52(1)、pp.273-286、静岡大学人文学部
- 黒木晶子（2006）「日本語母語話者が書いた小論文に関する一考察—丁寧形と普通形の混用についての分析を中心に—」『文教国文学』50、pp.65-78、広島文教女子大学国文学会
- 砂川有里子・マダドナーめぐみ（2017）「東京新聞社説にみられる文形シフト」『日本語教育連絡会議論文集』29、pp.54-71、日本語教育連絡会議
- 中村重穂（2011）「文形混用に関する一考察—『だ・である』形の『です・ます』形への混用について—」『北海道大学留学生センター紀要』15、pp.20-39、北海道大学国際本部留学生センター
- 野田尚史（1998）「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」『国語学』194、pp.89-102、国語学会
- メイナード・K・泉子（1991）「文形の意味—ダ形とデスマス形の混用について—」『言語』20(2)、pp.75-80、大修館書店
- 李在鎬・小林典子・今井新悟・酒井たか子・迫田久美子（2015）「テスト分析に基づく『SPOT』と『J-CAT』の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』18、pp.53-69、凡人社